

いわさきちひろのなかに息づく宮沢賢治

執筆者・上島史子

掲載誌：『絵本で読みとく宮沢賢治』（中川素子・大島丈志・編 水声社 二〇一三年十月）

第二次世界大戦後の日本の再生の時代に、子どもの本の世界で活躍した画家・いわさきちひろ（一九一八年～一九七四年）。ちひろが描き出す子どもたちの姿は、包み込むような母親の愛情や、大人になるにつれて見失ってしまいうような繊細な童心を感じさせる。桃色や藤色などのやわらかな色調がにじみあうその水彩画は、宮沢賢治の硬質で透明な輝きを放つ世界とは、かなり異質のものに思われるだろう。しかし、ちひろの人生や作品に、宮沢賢治は深い影響を与えていた。

宮沢賢治作品との出会い

ちひろは賢治の作品との出会いを次のように記している。

「私の娘時代はずっと戦争のなかでした。女学校をでたばかりのころは、それでもまだ絵も描けたし、やさしい美しい色彩がまわりに残っていて、息のつけないような苦しさはなかったのですけれど、それが日一日と暗い、おそろしい世の中が変わっていききました。そんなころに私はじめて宮沢賢治の作品にふれたのです。

草がぼしやぼしやはえていたり、青いりんごの色に暮れていく山なみ、むこうの丘に黒ぐろと消えのこっている松の群れ、日本の東北の山野のなつかしい草穂が、私の胸をうってせまり、素晴らしい交響楽のゆたかな音のなかにいる時のように、私にはもう外のものはないにもきこえないような気がしました。」

いわさきちひろは一九一八年（大正七年）、陸軍築城本部の建築技師の父と、女学校教師の母のもとに生まれた。大正モダニズムの時代、東京山の手の文化的な家庭で三人姉妹の長女としてのびやかに育った。幼い頃から絵が好きで、毎日のように絵を描いて遊んでいたという。ちひろが進学した第六高等女学校はリベラルな校風の学校で、女性が豊かな教養を身につけることが推奨された。「おっとりした優しいお姫さまみたいなた」といわれる一方で、水泳や登山、スキーなどスポーツも得意だった。十四歳からは洋画界の重鎮・岡田三郎助についてデッサンや油絵も学ぶようになり、三年後には朱葉会の洋画展で入賞するほどの画力をつけている。

一九三六年（昭和十一年）に女学校を卒業したちひろは、裁縫や書を習い、花嫁修業に励んだ。美術学校への進学への夢を抱いたこともあったが、両親の反対にあって断念している。良妻賢母となるのが女性の務めとされた時代であり、良縁に恵まれることが娘の幸せと信じる両親の元で、ちひろ自身もそのことに大きな疑問を抱くことはなかったのだろう。一九三九年、二十歳のときに、親の気に入った相手を婿養子に迎えて結婚、旧満州（中国東北部）大連に渡って暮らし始める。しかしこの結婚は、ちひろが相手を愛することができないまま、二年にも満たずに、夫の自殺という悲劇的な結末を迎える。

一九三七年（昭和十二年）に日中戦争が、一九四一年（昭和十六年）には太平洋戦争が始まり、日本の戦時体制は次第に厳しさを増していた。ちひろの母親は教職を退いて、大日本女子青年団の主事となり、満州の開拓団に大陸の花嫁を送り出す職務を担うようになっていた。満州から帰国したちひろは、社会的な地位がますます高まった両親のもとで、習字を教

えたり、再び油絵を学ぶようになった。ちひろが賢治の作品に触れたのはそのころだったようだ。

宮沢賢治の作品が広く読まれるようになったのは、一九三三年（昭和八年）、三十七歳で賢治が亡くなったあとのことである。草野心平や高村光太郎らが、遺族とともにその作品や賢治本人の紹介に取り組み、一九三四年から翌年にかけて、最初の全三巻の『宮沢賢治全集』（文圃堂）が刊行された。一九三九年（昭和十四年）には、より充実した全集や選集の単行本が出版され、賢治ブームがおとずれる。厳しい出版統制のなかでも賢治の本は次々に刊行された。ちひろが手にしたのは当時最も普及したといわれる羽田書店版の単行本『宮沢賢治名作選』ではないかと推測される。賢治の詩に魅了されたちひろは、そこから全集へと進み、その精神に近づこうと法華経の経典も手に入れたようである。

一九四四年（昭和十九年）、ちひろは女子開拓義勇隊とともに、書道教師の名目で満州・勃利へと渡る。戦況が悪化の一途をたどっていた時期であり、当時の開拓団の現実を目にしたちひろは、一時心身を病んだという。幸運にも縁のあった現地の部隊長が、戦況の悪化をみこしてちひろを三か月で帰国させてくれたので無事であったが、いっしょに渡った開拓団の人たちで生きて日本に戻ってきた人はいなかった。一九四五年（昭和二十年）には日本本土の空襲が激しさを増し、五月の東京山の手の空襲で、中野にあったちひろの自宅も全焼した。ちひろの家族は、長野県松本市の母親の実家へと疎開する。

第二次世界大戦後の再会 日記「草穂」より

宮沢賢治の作品との再会は終戦直後だった。終戦の翌日から同年九月六日までのちひろの日記が現存する。「草穂」と題された日記の初日には、「国破れて山河有里（有り） 昭和二十年八月十六日」と記された山のスケッチとともに、次のように記されている。

「敗戦の日、胸が一杯になってただむしゃくしゃ日本のやり方が悲しかったけれど、今日はそのほとぼりするような激した感情が潮を引いたように静まりたまらなくやるせなく寂しい心で一杯になった。深々とした大地のふところにいだかれ遠くアルプスの前山をのぞみジーという蝉の声をきく。久しく遠ざかっていたスケッチをしつつ金しよう寺山（金松寺山）の面白い形と峰をゆく白雲をしみじみ味わう。武装解除の日本かー。まだまだ戦をつづける余力ありと信じきっていた私はガンと脳天をなぐりつけられ昏倒したあとと徐々に朦朧とした意識を回復しつつ、そのくやしさを思い出し始めたような青い切なさど怒りを覚える。（中略）青草がそつと足になびいてたまらなくいとしい。この草々の色、山の青さ、日本の大空よ！！赤松の幹は西日をうけて光っている。」

八月十五日、ちひろは疎開先の松本の母の実家から、再疎開のため梓川村の父の実家に出かけ、そこで終戦を迎えた。夏の日差しに照らされた山間の村で、日本の敗戦をどう受け止めてよいのか困惑する二十六歳のちひろの姿が見えるようだ。この翌日からちひろは賢治の詩集を読んでいる。

「きのふから宮沢賢治の事で夢ごちだ。先々から少しばかりはそうであったけれどいまは熱病のやうになってしまった。前に詩集をよんだ時もつとよく読んでおけばよかった。アカシアの葉が目にチリチリ輝く八月の高い熱のやうに私のこころは燃えている。年譜を見ただけでなみだくみたくなるし、焼いてしまった法華経の経典がいまほしくてたまらない。

（八月十八日）」

疎開先の荷物のなかに賢治の詩集を忍ばせていたのだろうか。この記述からは戦時中とはまた違う思いで、賢治をとらえていることがうかがえる。自然豊かな信州で読む賢治の詩は、直にちひろの心に響いたのだだろう。賢治の年譜も読み込んでおり、その人生や思想にも強い共感をいただいている。

「これから先世の中はどうなるのか、こんぐらかってわからないけれど 私はまづ田舎からはなれるのをよそうと思ふ。女学校の先生か小学校の先生にいまのところはなるつもり 東京の様子でも落付いてきたら絵の勉強に出かけます。それまでは此処でコツコツやるつもり 宮沢賢治の詩を日に何回となくよむ（八月二十一日）」

花巻農学校の教師を勤め、岩手の故郷で農業の指導者として生きた賢治の人生に、自分も倣いたいと考えたのだろうか。ちひろは家族にも賢治の話ばかりしていたようで、食事中に妹から「お姉さんは宮沢賢治の話しかしない」といわれて落ち込んだこともあったようだ。ちひろをよく知る人たちは、普段は静かでおとなしい人だったが、人一倍感受性が強く、情熱的な一面があったと語っている。この時期の宮沢賢治への熱中ぶりは、そんなちひろの一面がよく表れている。日記の文章も、次第に賢治の詩の文体に似てくる。

「なみなす山峯にかこまれ

螺鈿の雲のいくたたね

朝な夕なに訪れては去る

此の静かな山村

私は六月にこの地に来た

ばかりですけれど

私の父を生み母を生み そだてた

（いえ もつと遠く限りない

何代も前からの）

本当の故郷なのです

岩崎家のお墓も いま

私の腰を下ろしているこの丘に あり

いま 秋風にそよいでいる

この草穂も光も

深い深い因果のつらなり。（八月二十八日）」

野山を歩きながら手帳に心象をメモしていた賢治を真似て、日記を手に丘に出かけ、自分の心象を写しとろうとしたようだ。賢治にとって岩手県がイーハトーブであったように、ちひろは自分のルーツである信州をみつめようとしたのだろう。しかし、都会育ちのちひろの心は揺れ動き、花巻で生涯を過ごした賢治のようにはいかなかった。

「都会なんて大きらひで

やわらかな虚飾のない農村にあこがれた

私の心のどこからか

なつかしく切ない吐息が流れる。

指が馬鹿に素早く動く

いまピアノが弾きたいな

あゝ三井コレクション

ピサロ、モネ、ボナール
ルオーのかなしい女達が
切なく赤いライトにをどる
焼けてしまったローランサンの朱い額と
ゴッホの燃えているあの木や草
私の夢は寂しく駆ける
けれど田舎は美しいのよ
あのノコギリ山と霧と青田の色は。
それでも何と寂しいか
つきあへば可愛のだけれど
人見てののしり後姿をわらふ
はだしの子

都会の空気の中で
大人になった私はここはあんまり
すきとほりすぎる

大きな水素玉の中に
透明な風光を

うつしているとしか見えぬ

私に接色（触）面のない景色

“あんまりへんなをどりをやると

未来派だっていわれるぜ”

宮沢賢治の大自然に

すっかり自分がとけきつて

共にかたっている姿を

心より賛美したひきつて

その幸福を汲みとるべく

私は都会をはなれたが……

（でもまだ絶望ではない

まだ何程も土と生活したのではないのだから）

然し東京のこひしさ

思ひもかけなかったこの心に

今宵私はねむれない（九月四日）

最後の日付の九月六日、「南妙法蓮華経」の文字が見開きいっぱい書き連ねられ、わずか三週間でこの日記は終わる。終戦直後の人生の岐路ともいえる重要な時期に書かれたこの日記からは、これからどうやって生きていったらよいか考え悩むちひろの心の動きをありありと知ることができる。そこには、宮沢賢治が深く関わっていた。日記の表紙に墨文字で書かれた「草穂」というタイトルも、賢治へのオマージュを込めてつけたものだろう。その後も、賢治の詩をもっとよむために詩集を借りたり、賢治の詩にある絵画性について熱く解説をしたという従弟の証言があり、賢治への傾倒はなお続いたようだ。

ちひろの大きな転機は二十七歳になって間もなく訪れる。一九四六年一月、松本で開かれ

た日本共産党の演説会に出かけたちひろは、聖戦といわれた戦争の実態を知り、大きく心を動かされる。戦争中、軍の方針に忠実だった両親のもとで、ものを考えずに生きてきた自分を、このとき強く悔いたに違いない。戦争をやめて正しい人を殺してはならない、平和のために闘わなくてはならないという切なる気持ちに駆られて、ちひろは日本共産党に入党する。宮沢賢治の文学とその生き方を深く読み込んでいたことが、信念を貫いて行動する勇気をちひろに与えたのではないだろうか。

賢治は優秀な農業・地質の学者であり、冷害や稲の病気、過酷な労働に苦しむ農民の生活がより豊かになることを願って、一生を尽くした人だった。「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」。「農民藝術概論要綱」に記されたこの有名な一文は、戦中には賢治の意図に反して、軍国主義を邁進する向きに利用されたりもした。戦後、価値観が一変するなかで、賢治がこの言葉に込めた本当の意味を、ちひろは問い直しただろう。後々までずっと、この言葉はちひろの心に生き続けた。

人々のために自分になにができるかを考えたちひろは、日本共産党宣伝部が主宰する芸術学校で生徒の募集があることを知り、五月、母にだけ行き先を告げて、まだ戦後の混乱が続く東京に戻る。昼間は人民新聞の新聞記者として働きながら、夜になると芸術学校に通い、本格的に絵の勉強に励む生活が始まった。丸木位里・赤松俊子（丸木俊）夫妻のアトリエにも通うようになり、若い画家仲間とともに人物デッサンに打ち込み、街中でも多くのスケッチを描いた。次第に新聞や雑誌、広告、童話の挿し絵などの仕事の依頼が増え、最初の紙芝居の依頼を受けた二十九歳のとき、画家として生きていこうと決意する。

新進の画家として活動を始めて間もない一九五〇年、三十一歳のときに、ちひろは党の活動を通して知り合った七歳半年下の松本善明と結婚、翌年には長男・猛を出産する。ちひろはあふれるような愛情を息子に注いだ。成長していく我が子の姿をいつも見つめ、繰り返しスケッチしていくなかで、ちひろはどんな格好をした子どもの姿も自在に描き出すデッサン力を身につけていった。子ども向けの本であっても、絵描きの多くが男性であった時代、子育てをする母親の眼差しでとらえたちひろの子ども像は多くの共感を呼んだ。

一九五〇年代には国内外の童話を集めた童話集がぞつて出版され、ちひろにも多くの依頼がくるようになった。もっとも多いのはアンデルセンの童話で、「おやゆび姫」「人魚姫」「マツチ売りの少女」などの童話を繰り返し描いている。宮沢賢治の童話集もこの時期数多く出版されるが、ちひろが絵を描いたもので確認できているのは、雑誌掲載されたダイジェスト版の「銀河鉄道の夜」のカット四点のみである。

賢治作品を描く 『花の童話集』

ひとりの画家が一冊すべての場面に絵を描くいわゆる「絵本」の出版が日本で急増したのは一九六〇年代も半ばからである。このころからちひろの仕事の中心は、「キンダーブック」や「チャイルドブック」などの幼児向け絵雑誌から、「絵本」へと移っていく。編集者や画家、作家たちが絵本とはなにかを考え、新しい絵本の試みが次々に行われたこの時代、ちひろも絵本でしかできないことはなにかを考え、独自の表現の絵本を模索していた。

一九六九年、五十歳のときにちひろは初めて宮沢賢治の本を手がけた。一九六六年から毎年一冊のペースで取り組んできた童心社の「若い人の本」シリーズの四冊目に企画された『花の童話集』である。児童文学者で、賢治の研究者である堀尾青児が、「岩崎さんに合うよう

に花をテーマにした童話ばかり集めるよ」と自らかつて出て選んだという六篇の童話「まなぶるとダアリヤ」「めくらぶどうと虹」「ひのきとひなげし」「黄色のトマト」「おきなぐさ」「いちようの実」が収録されている。

この本の制作にのぞんだときの想いをちひろは次のように記している。

「あんなに命のように大せつだった宮沢賢治も年月がたつていまはもう冷静にみられるようになりましたが、二十年の童画家生活のなかで、私はまだ一度もその作品のさしえを描いたことがなかったのです。はじめのうちは彼の作品が素晴しすぎて手も足もだせないと思っていたのですが、いまこうして童心社からのまれてみると描きたい気持がむらむらとおきて、そんな謙虚なことはいっていられなくなりました。」

いわさきちひろはこの仕事を、一九六九年五月に、長野県北端の黒姫高原にあるアトリエを兼ねた山荘に一週間ほどこもっておこなった。三年前に建てたこの黒姫山荘を、夫の松本善明は洗心亭と名付けたが、ちひろは独自に、春夏秋冬は「野花亭」、冬には「雪霽亭」と呼んでいたという。四季折々にさまざまな表情をみせる自然のなかの山荘は、東京暮らしのちひろにとって理想のアトリエだったのである。「宮沢賢治は黒姫で描きたい」というのはちひろの強い希望だったという。童心社に入社して間もなかった編集者・酒井京子が同行した。上野駅から列車に乗り、長旅をして山荘につくと、ちひろはその日の夕方から制作にかかった。賢治の文章を何度も読み、絵の構想を固めてきたようで、割り付けに沿って扉から順番に描き始め、できた絵は一枚ずつ畳の上に並べられた。

静かな山荘で賢治の世界と正面から向き合いながら、ちひろの脳裏には賢治を「いのちのように大せつ」に思っていた若いころの想いがよみがえってきたことだろう。ちひろは朝から夕方まで、時には夜まで仕事をしていたが、たいてい三時頃になると編集者を誘って散歩に出かけた。大きなつば広の麦わら帽子をかぶり、長靴をはいて、新緑の雑木林のなかの小道を歩きながら、「賢治もこうして、野や山を歩き、自然と話し合ったのだと思うわ。」と語っていたそうだ。

賢治は生前出版した童話集『注文の多い料理店』の序文で、自分の童話についてこう書いている。

「わたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。(中略)ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしたかたないということを、わたくしはそのとおり書いたままでです」。

美しく咲き誇り、やがて枯れていくダアリヤ。風にゆれるひなげしの群生。小岩井農場の片隅で花をつけたおきなぐさ。いつせいに飛び散るいちようの実。……自然が見せる現象や風景を、賢治は詩人の目で観察し、類まれな表現力で一篇の童話にした。色彩豊かで絵画的な賢治の童話を絵にするというのは、画家にとって至難の業だ。宇宙的な広がりをも読者に感じさせるその文に、固定した色や形を与えることは、イメージをかえって限定してしまうことになりかねない。

この本を手がけた頃、ちひろは絵本づくりの上で、説明的な要素を極力省略し、必要最小限のものだけを描く「引き算」の考え方を強く意識していた。絵本では、絵は文を説明するものではなく、文とあいまってひとつの世界をつくりあげるものだ。ちひろが目指していたのは、わかりやすい絵本ではなく、読者とともに感じることでできる絵本だった。そのためには五七五の十七文字で森羅万象を表現する俳句のように、多くを描かないことがかえって

読者の想像力を広げることもあるのではないか。

読者に賢治の世界を深く感じてもらうには、だれよりも画家自身がその世界を感じていないてはならない。ちひろは賢治にとつての岩手県・イーハトーヴと同じ世界を、長野県の豊かな自然のなかに感じようとしたのではないだろうか。賢治の童話から空想を広げるのではなく、賢治が心象にうつした自然そのものの現象を、自分の心でとらえてみる。賢治の文章は、太陽ひとつをとつても驚くほど多彩な表現がなされている。太陽が「コバルトガラスの光の粉」を播いたり、「かがやく琥珀の波」になったり、「みがきたて燃えたての銅づくりのいきもの」だったりするさまを、まずは自分が感じてみる。黒姫で仕上がった絵は一冊の半分にも満たず、残りは東京のアトリエで描かれたというが、この絵本を描く上で、黒姫の自然のなかに身を置き、山を見上げ、花や木の声を聞き、陽の光を十分に感じる時間は、欠くことのできないひとつの制作過程であったに違いない。

『花の童話集』は、ほぼすべての見開きに絵が入っていて、絵本ともいえる体裁の本である。ちひろはこの本を鉛筆と薄墨で描いた。「ひのきとひなげし」の「ひなげしはみんなまっ赤に燃え上がり、めいめい風にぐらぐらゆれて、息もつけないようでした」という冒頭の文章では、ちひろはいくつかのひなげしの花房を、墨を使って描き出している。ひなげしはちひろが庭でも育て、何度も絵に登場させてきた花であり、墨の濃淡やにじみだけでも花びらの特徴がよく表れている。「めくらぶどうと虹」の虹が現れる場面は、一見抽象画のような墨絵である。「東の灰色の山脈の上を、冷たい風がふつと通って、大きな虹が、明るい夢の橋のようにやさしく空にあらわれました」という文章と合わせてみたときはじめて、にじんだ太い墨の線は、七色の色彩に輝く虹になるだろう。この本の絵の多くは、賢治の文章とあわさってはじめて色をもち、本来の姿を見せるように描かれている。さつさつととひかれた鉛筆線が「かすかなかすかな日照り雨」になり、墨の濃淡のぼかしが「変幻の光の奇術」になる。ちひろの絵は読者の想像力をおおいに尊重しているが、賢治とちひろ、このコンビだから生まれる空気が、この本全体に満ちている。

ちひろはこの絵本を描いた後に、こう記している。

「たいていの人は私と宮沢賢治は異質で(もちろん私のていどがひく過ぎるといふ意味でしようが)どうなることかと懸念されるようですけれど、私が若いときから宮沢賢治を好きだったということは、通じるところがあるからだとそこは自信をもちます。私ふうに好きなように描いたので、それが私にはうれしくなりませんでした。この本は私の大せつな宮沢賢治です」。

カラーで印刷された表紙絵には、「ひのきとひなげし」のひなげしの姿が、水彩絵の具で描かれている。それまでもちひろはさまざまな姿の花の精を描いているが、花房のなかに娘たちの顔を描く表現は独特だ。賢治の童話から想を得た新たな表現なのだろう。賢治が花たちの会話に耳をすませたように、ちひろの目には花たちの表情が映っていたのかもしれない。

『花の童話集』で再び賢治の作品に向き合ったところから、ちひろの絵はより自然が豊かに息づくようになっていく。風景を描くのではなく、萌え出す緑、きらめく光や行き過ぎる風、けむる雨、空を染める夕日そのものを、そしてそのなかに身をおくときの心情を、ちひろは映し出した。晩年その画境はますます冴えて、代表作といわれる作品を数多く生み出してい

る。

松本猛は母・ちひろとなにかの機会に賢治のことを話した折、ちひろが賢治の詩を次々と暗唱したので驚かされたそうだ。なかでも「原体剣舞連」が好きで、ふたりで黒姫の暗くならかけた山道を歩きながら、いっしょに口ずさんだという。

賢治のまっすぐな信念や理想、その生き方、世界をとらえる独自の感性、研ぎ澄まされた表現力――。若いころにその作品に心奪われて以来、宮沢賢治はちひろのなかに、まるで自身心の一部のように存在していたのではないだろうか。画家・いわさきちひろが形成される上で、賢治との出会いは欠くことのできないものだった。

主な参考文献

宮沢賢治・作　いわさきちひろ・画『花の童話集』（童心社　一九六九年）

いわさきちひろ・文「宮沢賢治と私」（『ラブレター』講談社　二〇〇四年　一九六九年に書かれたものを再録）

松本由理子・編『いわさきちひろ　若き日の日記「草穂」』（講談社　二〇〇二年）

松本猛・文「宮沢賢治と母」（『ちひろの手鏡―母の絵を語る』（新日本出版社　一九八三年）

松本猛・文「黒姫にて（一）宮沢賢治への共感」（『ちひろのひきだし―母の絵を語る』（新日本出版社　一九八四年）

松本猛・文「宮沢賢治」（『母ちひろのぬくもり』講談社　一九九九年）

徳永美幸・文「ちひろの心に息づく宮沢賢治」（『いわさきちひろ絵本美術館通信 No. 11』）
○『いわさきちひろ絵本美術館　一九九六年）

酒井京子・文「黒姫山荘の日々」（『童話の森通信 No. 17』信濃町黒姫童話館　一九九九年）

草野心平・編『宮沢賢治研究』（十字屋書店　一九三九年）

松田甚次郎・編『宮沢賢治名作選』（羽田書店　一九三九年）

作品キャプション

日記「草穂」より　自画像　一九四五年八月二三日

日記「草穂」より　一九四五年九月六日

『花の童話集』「めくらぶどうと虹」より　一九六九年

『花の童話集』「ひのきとひなげし」より　一九六九年

『花の童話集』表紙　一九六九年